

ほなひ歴史通信

第112号

2024(令和6).9.1

想いを乗せてく水郡線全線開通九十周年

赤津康明

大子町に関する鉄道の歴史を振り返る時、今からおよそ百年前、大正十一年(一九二二)の四月十一日に鉄道省(現在の国土交通省)によって公布された改正鉄道敷設法がある。

それは、全国で新たに約一万キロに及ぶ一四九路線を整備するという壮大な計画であり、その中の第三六号には、大子に関する次のような記述がある。

「栃木県茂木ヨリ烏山ヲ経テ茨城県大子ニ至ル鉄道及栃木県大桶附近ヨリ分岐シテ黒磯ニ至ル鉄道」

つまり、大子から栃木方面へ向け、東北本線や烏山線、真岡線(現在の真岡鐵道)へと鉄道を延伸する計画があったのである。その効果について解説した『鉄道敷設法予定線路説明』(大正九年発行)によれば「茂木、烏山、馬頭、大子はいずれも地方物資の集散地であり、本線路の敷設は宇都宮を中心として物資の需給を円滑にすることに、大いに産業の発展に貢献するだろう」とされており、その実現には、地域の大きな期待が寄せられていた。

しかしその後、第二次世界大戦などの諸事情により、計画されていた新規路線の多くが着工されることのない「予定線」となり、大子と栃木県を結ぶ鉄道建設も幻に終わってしまったのである。

それから約十年後となる昭和九年(一九三四)、水郡線は地元住民の強い要望と数多くの関係者の懸命の努力が実を結び、水戸から大子を経て郡山へと続く路線として全線開通した。この間の経緯は、過去の本通信での野内正美氏、大金祐介氏、神長敏氏による玉稿などに詳しいが、まさに長年の悲願達成の瞬間であった。

その後の水郡線は、地域住民の移動手段として、また奥久慈を訪れる観光客の足として、走り続けている。令和元年東日本台風では、久慈川に架かる鉄橋が流出するという甚大な被害を受けたが、多くの人々の尽力により予定より早く再開することができ、今日に至っている。

先日、早曉のJR常陸大子駅周辺を散策した折、午前五時台の水戸行き始発列車に乗車する学生達の姿を見ながら、JR東日本の社歌『明け行く空に』の一節が思い浮かんだ。

明け行く空に響く笛の音は 今を出発(たびだ)つみんなの思い

風に乗れ君よ 君は雲に乗れ 目指す理想は大きな未来

本年十二月四日に、水郡線は全線開通から九十周年の記念すべき日を迎える。これまでどれだけの人々が、日々の生活のなかで、また未来への旅立ちの起点として、それぞれの駅を利用したことだろう。鉄道が町を走る有り難さと水郡線の歴史を想う時、その大切さを改めて実感する。

地域社会が、人口減少などの様々な課題に直面しているなか、大子町にとって、そして茨城県北地域の未来にとっても、水郡線は欠かせない存在である。これを次の世代につないでいくためにも、ここに水郡線全線開通九十周年を祝うとともに、路線存続への強い想いを新たにしたい。

(大子町副町長)

大子における内田熊蔵の足跡

内田正人

内田熊蔵は、私の曾祖父で、水戸の実家にある位牌には、「元治元年（一八六四）九月三十日、内田和三郎の三男として生まれ、昭和十五年一月十五日歿す 行年七十七歳」とあった。小さい頃に、熊蔵について、母から「厳格な祖父で、彼は明治時代に小学校の教員をしており、いろいろな学校で校長を勤めていたこと、特に大子町の小学校には長く勤務しており、大子二高の初代校長であった」という話をよく聞かされていた。小学校の教員であった熊蔵が、旧大子二高の初代校長ということに興味を抱き、彼の足跡をずっと辿ってきているのである。

明治五年（一八七二）、最初の近代的学校制度を定めた「学制」の発布当時は、寺子屋、私塾、禄を離れた藩校の士族が殆ど無条件で小学校教員に採用されたようである。明治七年一月に、本県で最初に新治県小学師範学校が土浦に開設、同年三月には、水戸に拡充師範学校が開設された。しかし、政府は師範学校における教員養成と併行して、試験（検定）制度を実施し、教員は士族階級から平民階級へと移っていくのであった。熊蔵は、この検定試験により免許状を受け、七等訓導となったのである。

熊蔵の足跡については、すぐに知ることができた。残されていた書物の中に『茨城県教育家略傳』上下二巻（明治二十七年（二八九四））があり、本県の百人以上の明治初期の教育家紹介の中に、熊蔵の教師としての略歴があったからである。熊蔵二十九歳の時の発行であるが、そこには、熊蔵が教師になるまでの経歴が詳しく記されていた。

さらに、茨城大学図書館で、『茨城教育家評伝』（大正三年（一九一四）茨城教成社）を閲覧したところ、久慈郡大子尋常高等小学校



長の写真と、彼の略歴が詳しく書かれていたのである。上の肖像写真は、この「評伝」の巻頭にあった。

熊蔵の略歴によれば、短い期間で、県内の数多くの小学校に訓導兼校長として勤務したが、久慈郡では、上小川、頃藤、小菅、幸久の各小学校に勤務の後に、明治三十九年（一九〇六）に大子尋常高等小学校長となった。熊蔵四十二歳の時であり、大正四年まで十年間奉職したのである。

明治四十三年（一九一〇）、熊蔵は、女子技芸学校の設立が、教育面から大子町の発展に寄与できるものであると、『いはらき』新聞紙上で主張した。この年に、大子町長益子彦五郎と熊蔵を顧問として、野内せき宅二階を仮教場にあて、大子女子技芸講習所が発足、熊蔵が小学校校長と兼務して、初代校長となったのである。『大子町史 通史編 下巻』。この女子技芸講習所は、女子技芸補習学校、女子技芸学校と名称変更、さらに県立大子高等女学校、県立大子第二高等学校となった。『八〇年のあゆみ清峰』。平成十八年（二〇〇六）に、高校再編により閉校となり、大子一高に統合され、現在の大子清流高校に引き継がれたのである。大子二高の沿革では、設立年は明治四十三年であり、熊蔵は大子尋常高等小学校長との兼務で、六年間勤めたことがはっきりしたのである。

大子に関する熊蔵の遺した史料は数多い。その一つに、大子尋常高等小学校の野紙に書いた『大子町郷土誌』がある。保内郷略図や袋田村池田の地図、明治四十一年度のクラス数、男女生徒数、教育費（校費）等の詳細が書かれているものである。関連史料については、別の機会を設けて紹介することとしたい。（日立市在住）

東京と大子町の二地域居住と

「DAIGO SAUNA」の物語

和田真寛

はじめまして、和田真寛と申します。私は、東京と大子町との二地域居住をしながら、「DAIGO SAUNA」という宿泊事業を営んでいます。大子町とのつながりは、私たち夫婦の祖父母の家が共に大子町にあったことです。子供の頃から夏休みやゴールデンウィーク、お正月などの時間をこの町で過ごしてきました。そして、コロナ禍が私たちの生活に大きな変化をもたらした時、自然豊かな環境で子育てをしたい、家族の時間を大切にしたいという思いが強くなり、町内の空き家を購入して令和四年から二地域居住をスタートしました。毎月一度、週末には家族と共に大子町を訪れ、豊かな自然に囲まれた生活を楽しんでいます。都会の便利さを享受しつつ、大子町での暮らしは私たち家族にとって欠かせないものになっています。

大子町では、子供たちが広々とした環境の中で自由に遊び、自然と触れ合うことができるのが何よりの魅力です。本音を言えば、仕事や子供の学校の調整などが必要になるので少し大変な部分もあります。しかし、季節ごとの豊かな自然体験ができることは、親としても非常にありがたく感じています。また、地元で採れた新鮮な野菜や、奥久慈しゃもや鮎の塩焼きを堪能することができますのも大子町の魅力の一つです。

そして、大子町の自然や文化の魅力をより多くの人に伝えたいという思いから、令和五年に「大谷石の蔵サウナと古民家宿・DAIGO SAUNA」を立ち上げました。二地域居住の遊休期間を宿泊施設として活用してより多くの人に大子町での特別な体験を提供することに大きな価値を見出しています。宿泊者には、薪ストーブや囲炉裏など、田舎ならではの温かみある体験を楽しんで

いただけます。また、大谷石の蔵を活用したプライベートルサウナも提供しています。見晴らしが良く、大子町の雄大な自然を存分に満喫できる環境にあります。四季折々の風景を眺めながら、日常の喧騒を忘れ、心地よい時間を過ごしていただけるよう努めています。この場所が、訪れる人々にとって大子町の新たな魅力を発見するきっかけとなり、そして何度も足を運びたいような場所になることを願っています。

大子町と東京を往来する生活を続ける中で、私は、町に定住する方が持ちにくい俯瞰した視点や、都市部で培った人や企業とのつながりを通じて、町に貢献できることを実感しています。これは二地域居住者だからこそできる役割だと考えており、今後その視点を生かして町の発展に寄与していきたいと思っています。そして、何よりも感謝しているのは、温かく迎え入れてくださった大子町民の皆さんです。私たち家族もこの町で楽しい時間を過ごせています。特に、子供たちが大子町の自然や文化に触れながら成長できることは、私たちにとって大きな喜びです。これからも家族として、この町でどんなことができるのかを楽しみにしています。

「DAIGO SAUNA」をきっかけに、大子町の魅力をより多くの人に伝えたいという思いがますます強まっています。これからもこの町のために全力を尽くし、皆さんと共に素晴らしい未来を築いていきたいと思えます。今後とも、どうぞよろしく願っています。

(東京都／大子町在住)



大谷石の蔵サウナと古民家宿

-DAIGO SAUNA-

所在地：大子町大子 354-11

Web：https://daigo-sauna.jp

常陸大宮市美和地域の住民による地域活性化活動

特定非営利活動法人美和の森 石井聖子

常陸大宮市美和地域には、時代の流れに伴う従来の農林業の不振と少子高齢化による地域の衰退に危機感を持った有志が、自発的に結成した地域活性化団体「森と地域の調和を考える会」(以下、「考える会」と記す)があります。この会は、様々な地域資源の保護と有効活用をすることで、地域に活気と明るさを取り戻し、持続可能な地域になることを目指して、平成二四年四月に結成されました。

美和地域は、市域の最北西に位置し、西は栃木県那須地域、北は大子町に接しています。下野や奥州との国境に接していた戦国期までの地理的環境、豊かな山林資源、葉煙草・和紙・楮・蒟蒻といったかつての特産物を背景とした、豊かで厚みのある歴史・文化を色濃く残しています。

「考える会」がまず取り上げた地域資源は、山に切り倒されたまま放置されている間伐材です。これを地域通貨「モリ券」で買い上げ、森林の整備・美化を促進するとともに、地域商店での利用を進めて地域経済の活性化を図りました。買い上げた木材は、キノコの菌床となるオガ粉やバイオマス燃料のチップといった有効な資源に加工して売却します。事業開始から一〇年余が経過した現在では、発行した「モリ券」の換金総額が一〇〇万円を超えています。

地域資源には文化財も含まれます。神社仏閣などと違い、日頃見慣れた風景や町並みに新鮮なまなざしを向け、価値を見出すことは難しいのですが、「考える会」では、地域に点在する、森林に覆われた中世城郭跡の環境整備、高部宿を中心とした特色ある街並みの美化を、多くの地域住民の協力のもと、行政に先駆けて

実施し、見学ツアーに募集人員を超える参加者があるなど、目覚ましい成果を上げてきました。

これらの活動が、山城跡や国登録を目指す高部宿内建物の調査、旧岡山酒造の庭園「養浩園」での文化財庭園技術者協議会員の実技研修開催など、行政を動かすきっかけとなつていきます。

令和四年四月には、「考える会」のメンバーが中心となつて「特定非営利活動法人美和の森」を設立。同年三月に養浩園内に建つ三階建ての望楼「喜雨亭」が国登録有形文化財、七月には養浩園が国登録記念物となりました。所有者の深いご理解とご協力によつて、庭園の定期的な一般公開と、喜雨亭内部を含めた秋・春の特別公開を行っています。定期公開は、月に一、二回に過ぎませんが、事前申込による団体見学もあり、令和四年度も五年度も、市外はもちろん県外からも、一〇〇〇人以上の方にご来場者いただきました。

私たちは、激しい人口減少によつて寂れ、諦念の漂う高齢化した地域を元氣付け、ふるさとに対する自信と誇りの種を創ることを目指しています。本当の地域の活性化には、地域全体に恩恵の及ぶ、地域に根差した産業の創出が必要です。しかし、当地においては、県を代表する観光地を持つ大子町とは異なり、観光に頼ることは困難です。

美和地域は林業で栄えた地であり、現在も豊かな森林資源に恵まれています。様々な要因によつてかつてほどの活気はありません。そこで、地域内の高齢級林を文化庁の「ふるさと文化財の森」に設定することを働きかけ、文化財建造物の修復材候補としてブランド化を図ることもしています。

『ほない歴史通信』を支える皆さん同様、それぞれに仕事を持ちながらの活動ではありますが、楮や漆など、共通する特産品を持つていた地域として、大子町の方々と協力し合つて県北西地域に活気をもたらしたいものです。

(常陸大宮市在住)

幕末期から明治期の「町」について

―「皆吉家文書」の紹介を通して―

小松崎研

『新編常陸国誌』によれば、江戸時代後期の「町」の中には、「小名」として、近町、本町、金町、泉町の「町」があった。

この「町」について、『大子町史 通史編 上巻』は、「行政的には藩の統制を受けながらも、町内の冠婚葬祭などの行事やその他の問題については、仲間の協力や話し合いによって解決するという自治的性格をもっていた」としている。

それでは、「町」の自治的性格とは、具体的にどのようなものなのであろうか。近年新たに発見された史料「皆吉家文書」を紹介しながら検討してみたい。

「皆吉家文書」は、平成二十八年（二〇一六）に、大子町泉町の皆吉家において、皆吉園の店舗として使われていた建物を取り壊した際に発見された文書群で⁽¹⁾、家業・家政、郵便局、書簡・葉書、書籍、大子町政、泉町に関するもの、以上約三千点が確認されている。このうち、泉町に関するものは、次のとおりである。

①幕末期から明治期の祭礼関係

十二所神社や愛宕神社の祭礼、コレラ除けの天王祭の費用を記録した帳簿。屋台の制作や修繕の費用を記録した帳簿。なお、屋台は弘化二年（一八四五）に修繕、同四年（一八四七）に新たに製作されている。

②明治期の普請関係

久慈川の渡船場から泉町に入る木戸の普請の費用を記録した帳簿。町内の道路に縁石を設置する普請の費用を記録した帳簿。町内の道路の修繕に人足として出た者を記録した帳簿。栄橋⁽²⁾の新規の普請の費用を記録した帳簿。なお、普請の費用

は、各戸による分担のほか、寄附によって賄われていた。

③幕末期から明治期の「町」の費用関係

「日指」、「日掛」の帳簿。水戸藩では村の費用である村入用を「指銭」や「指割」などと呼んだとされている⁽³⁾。「日指」、「日掛」とは、「町」の費用を、各戸から日ごとに徴収したものと考えられる。

④明治期の金融関係

「泉講中」の者が「町内金」から資金の融通を受けており、その返済を記録した帳簿。「町内金」とは、「町」が「日指」や「日掛」により集め、管理していた資金のことと思われる。

以上から、幕末期から明治期の泉町では、①祭礼の運営、②道路や橋などの普請、③「町」の費用の徴収、④金融（資金の融通）が行われていたことが分かる。このうち、①と③は、現代の町内会の活動に通じるものであるが、②は現代では公共事業として行われており、④も行われていない。

幕末期から明治期の「町」は、現代の町内会よりも幅広い「自治」を担っていたのである。

今後は、他の「町」の分析も行い、検討を深めていきたい。

注（1）大子町歴史資料調査研究員の大金祐介氏が、発見者の皆吉俊一氏から連絡を受けて調査を行い、筆者も調査に参加した。調査結果の概要については、大金氏により、平成三十年（二〇一八）八月四日のふるさと歴史講座で報告されている。なお、本稿は、報告の一部を再構成したものである。

（2）『大子町史 通史編 下巻』によれば、泉町通りと横町通りの交差点付近の中堀に板橋が架かっていた。普請に使われた材料等から、この板橋の可能性がある。

（3）野上平『水戸藩農村の研究』（風涛社、一九九七）

（水戸市在住）

大子町交流拠点施設の開業に寄せて

令和六年六月一日、大子町栄町に大子町交流拠点施設が開業した。同施設は、木造三階建て、通りに面した北側がガラス張りで、一階は特産物等の展示・販売スペース、二階は交流・休憩スペース、三階は多目的スペースになっている。年末年始を除き、毎日営業しており、午前九時から午後九時まで利用できる。特産品の販売、友人との交流、まち歩きのリゾート、児童生徒の自主学習、イベント会場など、様々な用途で活用され、中心市街地活性化の一翼を担うことが期待されている。

同施設の建築上の大きな特徴と言えば、木造三階建てであることだが、歴史を紐解くと、かつて中心市街地には、他にも木造三階建ての建物があった。菊屋旅館と栄屋旅館である。

菊屋旅館は、本町、現在のアパート「カーサクリサンテーム」のところにあった。創業時期は不明だが、主の高安徳四郎の名前が明治四十五年（一九一〇）四月発行の『衆議院議員選挙有権者名鑑』に見られることから、少なくとも明治後期には開業していたものと思われる。木造三階建ての建物は、現在の安田工務店の施工により、大正十一年（一九二二）十二月に竣工した⁽¹⁾。大子町最大の繁華街である金町通りと本町通りの交差点に隣接し、大子町を代表する洋風建築である大子銀行本店と本町通りを挟んで並び立つその姿は、さながらまちのランドマークだったことだろう。

栄屋旅館は、本町、現在の旧ロンシャン及びその西隣の民家のところにあった。大正四



大子町交流拠点施設



菊屋旅館（大正 11 年）



栄屋旅館（昭和初期）

年（一九一五）秋、海野新次郎が旧大子館（小室甲子男が経営していた旅館）を借り、さらに木造三階建ての別棟を新築して開業したが、翌年三月七日の大火で焼失した⁽²⁾。その後、再建を果たし、木造二階建ての洋風建築（旧ロンシャン）と木造三階建ての建物の二棟を構え、旅館と料理店を営業した。立憲改進黨系の大物代議士である大津淳一郎が宿泊する時は、箱枕を用意しなければならなかったというエピソードが残っている⁽³⁾。

両旅館は、政治史においても名前が残っている。大正十二年（一九二三）九月の茨城県議会議員選挙において、同選挙に立候補した立憲政友会の川口利吉は菊屋旅館に、憲政会の永瀬清は栄屋旅館にそれぞれ選挙対策本部を置いたのである。同選挙は保内郷を二分する戦いとなり、両旅館は激しい選挙戦の最前線となった⁽⁴⁾。このように、かつて中心市街地にあった木造三階建ての建物は、歴史に大きな足跡を残した。大子町交流拠点施設の歴史は、今、始まったばかりである。はたして、これから如何なる歴史が創られるのだろうか。私は楽しみでならない。

（大金祐介）

注（1） 菊屋旅館の木造三階建ての建物が写る写真の添え書きより

（2） 益子彦五郎『最近大子記事并ニ余町長ノ事績』

（3） 大子町史編さん委員会『語りつく大子の歴史』（一九八六）

（4） 霞五郎『保内郷土誌おらが在所』（一九五二）

荒卷氏の黒沢進出と那須天文の乱

戦国時代の黒沢村には、荒卷(蒔)氏と呼ばれる武士が居住していました。荒卷氏は、もともと岩城領であった小里(旧里見村域)に居住していましたが(「荒卷秀富由緒届書」)、いずれかの段階で、黒沢村に拠点を移し、佐竹氏家臣として活動するようになりました。本稿では、荒卷氏の黒沢村への土着の背景を紹介します。

黒沢村には、一五世紀末頃より、白川氏家臣と思われる深谷氏が居住していましたが、天文一〇年(一五四二)から一三年の頃に、佐竹氏当主義篤からの攻撃を受け、滅ぼされてしまいます。深谷氏に代わって黒沢村に入ったのが荒卷氏でしたが、永禄元年(一五五八)に上郷の高徳寺に涅槃図(大子町指定文化財)を寄進する以前の動向は詳らかになっていません。

荒卷氏の黒沢進出以前の動向がわかる、次の書状に注目してみます。

お手紙をいただきお喜び申し上げます。いかにも(状況がよく聞こえていたのに(このようなこととなり)、(味方は)いずれも油断をしたのだと思います。思いがけなく、拠点を確保できています、そこで、普請のことについて、(佐竹義昭様の命で)石井豊前を遣わしました。このたびよく、普請が整うように(豊前と)談合なさってください。又、須賀川の者たちを降伏させたとおっしゃいましたね。そのことが事実であれば、(豊前と)談合なさってください。あなたによく伝えるよう、豊前にもお話ししておきました。かしこ。

荒卷掃部殿

義里

(天文一八年から二〇年頃、秋田藩家蔵文書五)

佐竹氏当主義昭の叔父で、大子地域の武士の統括や、南郷・那

須地域の外交を担った佐竹南家当主義里が、荒卷掃部(秀繩)に送った書状です。年月日が無く、状況の推定が難しいですが、上那須地域(現大田原市・那須町)の須賀川(現大田原市)方面での戦闘の様子が記されていることから、天文一八年(一五四九)頃から同二〇年にかけて行われた、那須氏当主高資をめぐる戦乱(那須天文の乱)に関わるものと考えられます。

那須天文の乱の中、佐竹氏は岩城氏とともに那須高資を支援するために軍勢を遣わします。その主力となったのが、荒卷氏でした。荒卷氏は高資方として軍事行動を行い、高資から、「このたびのこちらの『取乱』(内紛)のために、二度も出陣いただき、大変喜ばしいことです」と札状が出されています(「秋田藩家蔵文書」五)。また、岩城氏当主重隆からも、「那須家の内紛で、こちら(岩城)から那須地域に向かった者に大変よくしてくれ、感謝する。：今後とも那須地域を往復する者たちが無事に通行できるようにしてもらえたら、うれしい」と、乱の影響で途絶えがちな通行の安全を保証していることが評価されています(「秋田藩家蔵文書」五)。

南義里書状でも、荒卷氏が那須氏方の須賀川勢を降伏させるとともに、那須氏に対応するための城郭の普請を担うなど、上那須勢との戦闘に対応した動きをしていることがわかります。そこに、義里重臣で生瀬に基盤を置く石井豊前が派遣されています。ただ、佐竹氏方の義里が荒卷氏に対して丁寧な言葉遣いをしているため、この時点では荒卷氏はまだ岩城氏家臣であったと考えられます。

天文二〇年の高資の横死で、那須天文の乱は終わりを迎えます。その際、荒卷氏の功績をねぎらい、佐竹氏が新たな所領として与えたのが、黒沢村であったと推定されます。那須天文の乱への従軍を通じて、荒卷氏は佐竹氏や佐竹南家と接点を持ち、保内の武士へと転身を遂げたのです。この後、荒卷氏は南家の重臣として活躍し、南義尚の那須家継承計画の際にその付人を選ばれるなど(計画自体は失敗)、那須地域との関わりも続きました。(藤井達也)

北海道への勤労動員と大子農林学校生（下）

—「いはらき」新聞に見る戦争時代の大子（7）—

昭和一八年から始まった茨城県内農学校生徒達の北海道への勤労動員・援農は、三年目を迎えた。甚だしい労力不足に陥いるなか、食糧基地としての生産力を維持するためには道外からの援農が欠かせないものとなっていた。

昭和二〇年五月一日、北海道庁は道内の各支庁長、各町村長等宛に「昭和二十年度緊急食糧増産北海道派遣学徒動員二関スル件」を發した。その「第一次道外学徒町村別割当表」によると、茨城県内七つの農学校の生徒達は十勝支庁管内の町村に割り当てられている。その一つ、大子農林学校は前年に続く二度目の援農であるが、河東郡鹿追村（現鹿追町）が受入先となった。受入人数は生徒五〇名と引率教諭二名、出發予定日は五月一七日、期間は三カ月、という条件は他の六農学校も同様である（『大地への献身』）。

鹿追村は大子農林学校と種々連絡を取り合ったに違いない。また、県も準備のための打合会を開いた。その模様を茨城新聞が伝えている。「一昨年来本県からも毎年数百名の農学徒を以て北海道緊急食糧増産農学校報国隊を結成派遣して来たが本年も左記十農学校から五十名づゝ五百名の農学徒を派遣し基地食糧増産に協力する事になり十日午前九時から水戸市三の丸校において県及び派遣学校教職員、水戸管理部員等出席して出動打合会を開き輸送、受入指針その他細部に亘つて協議するが大体出發は十七日午後二時十六分水戸駅發の予定である」（昭和二〇年五月九日付）。なお、「左記十農学校」の学校名は記事中には明示されていない。

五月一七日、予定通りの出發であった。大子農林学校の「農科二年生四十五名は谷田部教諭、益子助手の引率で十七日午後四時大子駅發勇躍北海道に向つて出發した、今回は三ヶ月の期間で同

校は十勝河東郡鹿追村に分宿して決戦農耕の陣を張るが、大子農林健児の名譽にかけて不撓の聖鏃を揮はうと一同の士氣いよいよ軒昂であつた」（同年五月一八日付）。アメリカ軍による日本本土への空襲が本格化するなか、遠く北海道まで移動するのは危険に満ちていたと思われるが、無事に目的地に着いた。現地からの第一報を、茨城新聞が報じた。「食糧増産学徒挺身隊：一行は十勝河東郡鹿追に分宿して北国食糧基地の増産に大子農林健児不撓の闘魂を遺憾なく發揮して士氣益々旺盛、土の尖兵に連日感激の聖鏃を揮つてゐると力強い現地第一報が齎されて鈴木校長以下職員残留学徒を躍らせてゐる」（同年六月二五日付）。鹿追村で、増産に鋭意取り組む生徒達の姿が確認できる。その後、引率の谷田部武雄教諭に代つて岡村英教諭が現地向かつたとの報道はあるが（同年七月四日付）、鹿追村での援農現場を伝える続報はない。

大子農林学校の生徒達は、予定期間を大幅に超過した一〇月二日に帰還した。八月一五日の敗戦とその後の激動の日々を、生徒達はどのような思いで、どのような生活環境の下で過ごしたのであろうか。また、『大子町史 通史編 下巻』は、援農の受入先を十勝支庁の中川郡池田町としている。新聞報道で確認できる鹿追村については何ら言及していない。この大きな違いをどう解釈したらよいか。残された課題は多いが、他日を期したい。（齋藤典生）

編集 大子町歴史資料調査研究会
編集人 齋藤 典生（大子町歴史資料調査研究員）

藤井 達也（大子町歴史資料調査研究員）

大金 祐介（大子町歴史資料調査研究員）

神長 敏（大子町教育委員会事務局）

大金 真理子（大子町教育委員会事務局）

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

0295(72) 1148

発行日 二〇二四年（令和六）九月一日